本音，嘘，冗談，皮肉などの修辞表現を区別する認知過程の検証
ー聞き手による発話の評価と，聞き手による話者の意図の推測に関する調査からー

瀧澤　純(宮城学院女子大学　学芸学部)

1. はじめに

本音，嘘，冗談，皮肉など，言葉に裏があるかないかを推測する言語的表現を，修辞表現（figurative expression, rhetorical expression）とする．本稿は，これら修辞表現の共通性と相違性に関して報告し，修辞表現の区別を行う認知過程について検討を行う．

研究で使用する用語について述べる．修辞表現のうち，言葉に裏がないとされる言語的表現を本音表現（sincere expression）とする．また，言葉に裏があるとされる嘘，冗談，皮肉などの言語的表現を非本音表現（insincere expression）とする．非本音表現については，語用論的表現（pragmatic expression），非字義的表現（unliteral expression），遠回し表現（indirect expression），言葉のあや（figure of speech），文彩（trope）など関連する文言があるが，本研究では本音を中心とする本音表現との対比を明確にするために，非本音表現という用語を用いる．

先行研究について述べる．古典的な研究では，非本音表現の中でも嘘や皮肉（アイロニー）や比喩などが取り上げられてきた（e. g. Grice, 1989/1991; Sperber & Wilson, 1995）．これらでは複数の非本音表現が単一の原理から説明されており，非本音表現全体が本音表現との対比で捉えられている．そのため，人が修辞表現全体をどう区別するのかが明確になっておらず，修辞表現を解釈する仕組みが明らかになっていない（同様の指摘として，中村，2002）．

一般に，修辞表現に関する研究では，単一の修辞表現が扱われる（アイロニーに関する例として，内海，1997；岡本，2004）．嘘とアイロニーなど複数を扱った研究もみられるが（e. g. 春木，2006；Okamoto，2006；竹内，2014），4 種類以上の修辞表現を統一的に扱った研究はみられない．例外として，伊藤ら（2001）では，嘘，罪のない嘘，比喩，ふり，冗談，皮肉を選択するような課題を使用しているが，修辞表現の区別については触れられていない．

2010 年以降，修辞表現の区別に関する理論的提案が行われている（岡本，2010；瀧澤，2019）．瀧澤（2019）は岡本（2010）を批判的に検討したうえで，聞き手による 4 つの認知「違和感の知覚」「誤認判断」「隠蔽判断」「笑い判断（非攻撃性）」をかけあわせることによって，本音，間違い，嘘表現，からかい，反語表現・アイロニーが区別できる可能性を提案している。ただし，岡本（2010）と瀧澤（2019）は理論的提案に留まっており，理論の実証は行われていない．そこで，修辞表現を区別する認知過程について実証的に明らかにすることを第一の目的とする．研究では「言葉に違和感があるか」などの質的な判断を行うときの認知を扱う必要がある．そこで，言葉の聞き手に思考や感性を尋ねる手法として，本研究は調査法を採用する．調査の回答者には，修辞表現の名称から場面を想像し，聞き手として発話への評価や話者への評価を行うことを求める．また，修辞表現に加えて，言語的要素を含む対人行動（いじり，助言，陰口など）を尋ねることにより，修辞表現の特徴を対人行動との関連から明らかにすることを第二の目的とした．

2. 方法

2.1 調査対象者

東北地方の大学で心理学系科目を受講する大学生 93 名であった．調査対象者はすべて女性であった．年齢は調査で尋ねなかったため，不明である．

2.2 調査

発話／話者評価（例：「A.相手の言葉の文字的な意味だけをとらえればポジティブである」）にあてはまるものを，修辞表現と対人行動の 25 項目からすべて選択するように求めた．質問の文言は，「以下の言葉・行動それぞれをあなたが聞く側・される側であることを想像してください。そのとき、『相手の言葉の文字的な意味だけをとらえればポジティブである』という特徴におおむねあてはまる言葉・行動は、以下のうちどれですか。あてはまる言葉・行動すべてにチェックをしてくだ

さい。」とした.

調査で用いた発話／話者評価は「A.相手の言葉の文字的な意味だけをとらえればポジティブである（字義ポジ)」「B.相手の言葉の文字的な意味だけをとらえればネガティブである（字義ネガ)」「C.相手の声、表情、動きのうち、いずれか一つ以上に違和感がある（違和感)」「D.相手の認識が間違っている（認識違い)」「E.相手の認識は間違っていないが行動が間違っている（行動違い)」「F.相手が気持ちを隠そうとしている（隠そう)」「G.相手が気持ちを隠そうとしていない（隠さず)」「H.相手が自分を傷つけようとしている（傷つけ)」「I.相手が自分を笑わそうとしている（笑わせ)」の9種類であった.（ ）内に略称を示す. 修辞表現は「1.嘘」「2.お世辞」「3.欺瞞」「4.からかい」「5.冗談」「6.照れ隠し」「7.ツンデレ」「8.比喩」「9.言い間違い」「10.思い違い」「11.本音」「12.言葉のとおり」「13.皮肉」「14.嫌味」「15.攻撃」「16.アイロニー」「17.反語」の 17 項目であり，対人行動は「18.いじり」「19.悪口」「20.陰口」「21.助言」「22.叱り」「23.不満」「24.愚痴」「25.悩み」の8項目であった.

2.3 手続き

調査の目的について説明し，調査に関する問い合わせ先などを伝え，研究への参加を依頼した. 研究への参加／不参加による利益と不利益の説明を行い，参加に同意する場合にのみGoogle forms 上で回答するように求めた.

3. 結果

3.1 発話／話者評価の該当性

調査対象者 93 名全員を分析対象とした. 発話／話者評価に該当するとした人数を，修辞表現と対人行動ごとに集計し，発話／話者評価 9 種類×修辞表現と対人行動 25 項目となるクロス集計表を作成した. 発話／話者評価への該当者数を，修辞表現と対人行動のそれぞれについてTable 1に示す.

3.2 修辞表現と対人行動の分類

修辞表現と対人行動の計 25 項目を分類することを目的として，作成したクロス集計表を用いてウォード法によるクラスター分析を行った. クラスター分析にはCollege Analysis Ver.9.0を使用した. 個体間の距離として平方標準化ユークリッド距離を用いて，欠損値除去を自動，Yates 補正をあり，同順位補正をありに設定した. 解釈可能性を考慮して，本稿ではクラスターを10個に分類した場合と，6個に分類した場合を報告する（Table 1).

3.3 修辞表現と対人行動の共通性と相違性

調査対象者の過半数である47名以上であった箇所に着目する（Table 1，下線部). 嘘，お世辞，照れ隠し，ツンデレは，「相手（話者）が気持ちを隠そうとしている」ものとして共通していた. ただし，嘘とお世辞は「相手の声、表情、動きのうち、いずれか一つ以上に違和感がある」ものであり，さらに，お世辞と照れ隠しは「相手の言葉の文字的な意味だけをとらえればポジティブである」とみなされていた. 欺瞞，アイロニー，反語，悩み，叱り，不満，愚痴は，「相手の言葉の文字的な意味だけをとらえればネガティブである」に該当する点で共通していた. ただし，その程度が強いのは叱り，不満，愚痴であった. 言い間違いや思い違いは，「相手の認識が間違っている」ものとして共通していた. からかい，いじりは「相手の言葉の文字的な意味だけをとらえればネガティブである」に該当する点で共通していた. さらに，からかいは「相手が自分を笑わそうとしている」傾向が高く，いじりは「相手が自分を傷つけようとしている」という傾向が高かった. 冗談は「相手が自分を笑わそうとしている」ことに特徴があるとされていた. 比喩と助言は「相手の言葉の文字的な意味だけをとらえればポジティブである」ものとして共通点があった. 本音と言葉のとおりは，「相手が気持ちを隠そうとしていない」ことで共通点していた. 皮肉，嫌味，攻撃，悪口，陰口は，「相手の言葉の文字的な意味だけをとらえればネガティブである」，かつ，「相手が自分を傷つけようとしている」ものとして共通していた. ただし，皮肉と嫌味は「相手の声、表情、動きのうち、いずれか一つ以上に違和感がある」傾向が高かった.

3.4 発話／話者評価による修辞表現の区別

以上の結果から，修辞表現を区別する認知過程についてのモデルを提案する. Table 1について，「A.相手の言葉の文字的な意味だけをとらえればポジティブである（字義ポジ)」から「B.相手の言葉の文字的な意味だけをとらえればネガティブである（字義ネガ)」を減算し，字義のポジティブ度を計算した. 93名の25%である23名を区切りとして，字義のポジティブ度が-93から-23までを「ネガティブ」，-22から22までを「中間または両方」，23から93までを「ポジティブ」とした. その他は調査対象者の過半数である47名未満であれば「少」，47名以上であれば「多」とした. 以上について，修辞表現17項目についてTable 2に示す.

Table 1　修辞表現・対人行動による発話や話者への該当者数と所属クラスター

修辞表現 対人行動	発話／話者評価									所属クラスター	
	A 字義 ポジ	B 字義 ネガ	C 違和感	D 認識 違い	E 行動 違い	F 隠そう	G 隠さず	H 傷つけ	I 笑わせ	10 分類	6 分類
1.嘘	29	46	69	16	23	71	0	21	16	①	①
2.お世辞	55	28	51	19	16	59	4	6	22	②	①
6.照れ隠し	51	12	36	6	12	73	5	1	12	②	①
7.ツンデレ	41	19	33	7	20	65	3	1	7	②	①
3.欺瞞	6	55	29	10	16	23	3	23	0	③	②
16.アイロニー	3	39	23	6	12	13	10	26	0	③	②
17.反語	5	28	18	8	5	11	7	14	0	③	②
25.悩み	10	39	20	6	1	6	31	7	2	③	②
22.叱り	7	61	21	9	12	2	35	28	1	④	②
23.不満	3	76	23	23	15	6	37	26	1	④	②
24.愚痴	2	75	25	19	18	11	45	28	2	④	②
9.言い間違い	15	24	21	46	24	6	11	1	6	⑤	③
10.思い違い	12	25	30	63	16	5	9	1	1	⑤	③
4.からかい	18	61	32	13	30	15	13	31	60	⑥	④
18.いじり	5	65	30	18	30	15	16	49	29	⑥	④
5.冗談	36	20	22	10	13	34	8	8	82	⑦	④
8.比喩	34	10	2	5	3	13	8	0	9	⑧	⑤
21.助言	56	8	7	8	1	1	20	4	1	⑧	⑤
11.本音	45	10	5	6	4	2	85	1	4	⑨	⑤
12.言葉のとおり	34	14	1	5	5	0	63	3	4	⑨	⑤
13.皮肉	9	77	55	15	32	32	20	79	0	⑩	⑥
14.嫌味	6	85	52	16	36	26	24	85	0	⑩	⑥
15.攻撃	1	79	29	19	34	9	35	83	2	⑩	⑥
19.悪口	1	89	38	20	35	9	38	85	2	⑩	⑥
20.陰口	0	85	41	19	32	21	26	79	1	⑩	⑥

Table 2　発話／話者評価による修辞表現の区別

修辞表現	発話評価		話者評価			
	字義	違和感	傷つけ	隠そう	笑わせ	認識違い
皮肉，嫌味	ネガ	多	多	少	少	少
攻撃	ネガ	少	多	少	少	少
からかい	ネガ	少	少	少	多	少
欺瞞，アイロニー，反語	ネガ	少	少	少	少	少
嘘	中間または両方	多	少	多	少	少
ツンデレ	中間または両方	少	少	多	少	少
冗談	中間または両方	少	少	少	多	少
思い違い	中間または両方	少	少	少	少	多
言い間違い，言葉のとおり	中間または両方	少	少	少	少	少
お世辞	ポジ	多	少	多	少	少
照れ隠し	ポジ	少	少	多	少	少
本音，比喩	ポジ	少	少	少	少	少

4. 考察

本研究では修辞表現の共通点と相違点を実証的に示し，修辞表現を区別する認知過程についてのモデルを提案した．本研究で扱った発話／話者評価はすべて修辞表現の区別に寄与していた．また，「相手の言葉の文字的な意味だけをとらえればポジティブである」のような発話についての評価だけでなく，「相手が気持ちを隠そうとしている／いない」のような話者

の意図についての評価も影響していた．本研究を瀧澤（2019）と比較すると，話者評価に「傷つけ」が加わった点，字義が中間または両方である場合がある点で異なっている．ただし，発話／話者評価の方向性はおおむね一致している．

重要な点として，本研究で提案した「発話／話者評価による修辞表現の区別」の妥当性には検討の余地がある．本研究による提案では，皮肉と嫌味，欺瞞とアイロニーと反語，言い間違いと言葉のとおり，本音と比喩は区別できなかった．より詳細に区別を行うためには，本研究で使用した発話／話者評価，修辞表現，対人行動以外にも検討すべきものもがあると考えられる．また，話者評価の順序を左から「傷つけ」「隠そう」「笑わせ」「認識違い」としたが，実際に人がどのような順で評価を行っているかは不明である．話者評価の「多」が重複していないことから推察すると，ひとつの話者評価で「多」となる手がかりを発見したところで，他の話者評価を行わなくなる可能性もある．認知の順序や停止規則に関するこれらの問題を明らかにするためには，調査法ではなく，実験的なアプローチが必要になるだろう．

5. おわりに

本研究の独自性のひとつは，修辞表現を統合的に捉えたことである．従来の研究では，嘘，冗談，皮肉などは個別に研究の対象となることが多かった．本研究のように修辞表現を統合的に捉えたアプローチが盛んになれば，従来の修辞表現研究を統合する役目を担うことができる。また，外国語教育や日本語教育などの言語教育への応用もありうる．例えば，外国語学習者における嫌味などの理解や産出においては，従来の「他者の気持ちを読み取ればいい」というような曖昧なものではなく，「攻撃的かどうかを読み取ればいい」というように，読み取るべき内容を明確にできる．このほか，心理・発達・福祉における臨床的支援への応用もありうる．これまでの研究で，自閉症スペクトラム障害（ASD）児・者）（Smith, 2001），統合失調症患者（Langdon et al., 2002），前頭側頭型認知症患者は（Shany-Ur et al., 2012），嘘や嫌味の理解に関する課題の達成度が低いと指摘されてきた．本研究から，障害や疾患をもつ対象者は，発話評価や話者評価のいずれかに困難を抱えている可能性を想定でき，支援すべき評価をより明確に決定できるようになるであろう。

参考文献

Grice, P. (1989/1991). *Studies in the way of words*. Cambridge: Harvard University Press. （グライス，P.（著），清塚邦彦（訳）（1998）．論理と会話　勁草書房）

春木茂宏　（2006）．アイロニーの記述的研究（3）賛辞、世辞、からかいとの比較　文学・芸術・文化：近畿大学文芸学部論集，pp. 39-69.

伊藤斉子・高原朗子・土田玲子・李家正剛・川村伶子・津田 剛・瀧上英一・川崎千里　（2001）．紙芝居形式による「心の理論」高次テスト作成に関する予備的研究　―健常青年の反応特性―　長崎大学医療技術短期大学部紀要，14，69-76.

Langdon, R., Davies, M., Coltheart, M. (2002). Understanding Minds and Understanding Communicated Meanings in Schizophrenia. *Mind & Language*, 17, 68-104.

中村芳久　（2002）．認知言語学からみた関連性理論の問題点　語用論研究，4，85-102.

岡本真一郎　（2004）．アイロニーの実験的研究の展望―理論修正の試みを含めて―　心理学評論，47，pp. 395-420.

Okamoto, S. (2006). Perception of hiniku and oseji: How hyperbole and orthographically-deviant styles influence irony-related perceptions in the Japanese language. *Discourse Processes*, 41, pp. 25-50.

岡本真一郎　（2010）．ことばの社会心理学 第４版　ナカニシヤ出版，pp. 148-149.

Shany-Ur, T, Poorzand, P., Grossman, S., Growdon, M, Jang, J., Ketelle, R., Miller, B. L. $ Rankin, K. P. (2012). Comprehension of insincere communication in neurodegenerative disease: Lies, sarcasm, and theory of mind. *Cortex*, 48, 1329-1341.

Smith, T. (2001). Discrete trial training in the treatment of autism. *Focus on Autism and Other Developmental Disabilities*, 16, 86-92.

Sperber, D. & Wilson, D. (1995). *Relevance: Communication and cognition. 2nd Edition.* Malden: Blackwell Pub. （内田聖二・宋南先・中逵俊明・田中圭子（訳）（1999）．関連性理論―伝達と認知（第２版）　研究者出版）

竹内道子　（2014）．うそと皮肉はどう違うか　ことばの使用からこころをみる　人文学研究所報，52，pp. 1-17.

瀧澤 純　（2019）．修辞判断の認知プロセス―本音、アイロニー、皮肉、嫌味、優しい嘘、欺瞞、間違い、冗談、からかい、照れ隠し―　総合研究（ノースアジア大学総合研究センター紀要），7，223-230.

内海 彰　（1997）．アイロニーとは何か？―アイロニーの暗黙的提示理論―　認知科学，4，99-112.